

「聞いてねえそんな話」

してないからね、としれつとして新羅は言う。

「その時点で、まあ思うことはあったけど、馬に蹴られたくなかったんだよね。結局蹴られることになったけど。まったく、世話がかかる友人を持ったもんだよねえ」

笑って、じゃあね、と言い、新羅は帰っていく。今度は静雄も引き留めなかった。彼が去った玄関を、半ば呆然と見つめる。

必死で新羅の言葉の数々を反芻し、理解し、それから軽く混乱した。

何しろ、新羅の台詞はどうしても静雄にとって都合の良い結論しか導き出さない。その回答を自分が望んでいるから、その結論しかでてこないのだろうか。そう考えたが、やはり結果は同じだった。

——すればいいと思うけどなあ。

告白などできるはずがないと告げた静雄に、そう新羅は言っていた。それは言え良い結果が得られると、少なくともそう彼は予測したから、なのだろうか。

帝人は、自分がキスしたときに多少混乱した様子で、少し怒って、惑っていた、ような気がする。けれどコンビニエンスストアのデザートを渡すと『これで許してあげます』と言った。つまりは、本気で怒ってはいなかった。多少さこちなくはあったけれど、笑ってくれもした。

そうして、翌日も、その翌日もこの部屋に来て、夕食を用意してくれたり、そのほかの家事もしてくれた。

新羅の言うとおり、本気で拒絶反応を示してもおかしくはないのに。それでも、彼はここへとやって来た。……それは、つまり。

そこまで考えた時だった。ささやかな音が聞こえた。

「……っ」

見れば、帝人が半身を起こそうとしている。息を詰めた様子なのは、体が痛むからだろうか。慌ててそばへと寄った。

「大丈夫かつ、竜ヶ峰！」

「……………あんまり、大丈夫じゃないです」

彼の声はいつものそれとは違っていた。掠れている。その理由に思い当たる節は十分、あった。自分が喘がせて鳴かせたせいだ。

「すまねえ。その、お前が好きなんだ」

言わないと決めていたはずの言葉を、ひどくあつさり、すんなりと気がつけば紡いでいた。

その言葉に、帝人は静雄を睨みつける。案外こいつ強気なんだな、と思った。抱いたときもかなうはずもないのに抵抗しようとしていたことを思い出す。

「当たり前じゃないですか、そうじゃなきゃあんなこと許さないですよ！」

「許して、くれんのか？」

問うと、帝人は静雄を睨んでいた目からぼろりと涙をこぼした。ぼろぼろと頬を伝うそれは、まるで宝石のように美しく思える。